

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2005～2008

課題番号：17530586

研究課題名（和文） 群馬県における教師のライフヒストリーの聞き取り調査

研究課題名（英文） Life history interview of teachers in Gunma prefecture

研究代表者

平野 和弘（HIRANO KAZUHIRO）

東洋大学・国際地域学部・教授

研究者番号：50348132

研究成果の概要：

科研費補助金の助成を受ける以前からのものも含めて 30 名の群馬の小・中・高の教師の公開インタビューを実施し、参加者が 10 名に満たない時もあったが、多い時は 50 名を超える一般市民も含めた参加者たちと共に、「語り」を触媒とする地域における意味生成の実験的空間を創出・維持してきている。その貴重な記録は、「戦後教育史学習会ニュース」というかたちで学習会を支える会員たちに郵送され、さらにそれを製本した「年報戦後教育史を学ぶ」も 3 冊が刊行済みで、4 冊目もすでに編集を終え、印刷・製本を待つばかりになっている。2009 年 3 月にはシンポジウム「日本の教師の歩んできた道」を開催し、北海道における「教師の学校」の実践・研究との交流を通じて、教師のライフヒストリーの語り・聞き取りの研究的実践の現段階における成果と課題を確認した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 17 年度	700,000	0	700,000
平成 18 年度	500,000	0	500,000
平成 19 年度	500,000	150,000	650,000
平成 20 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,200,000	300,000	2,500,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：教育史

1. 研究開始当初の背景

本研究の発端となった「戦後教育史と教師のライフヒストリー」という市民講座の構想は、かつて軍国少年の優等生であった一教師

の次のような述懐から生れた。その教師は、組合活動家として民主日本の建設という新しい歴史の大義のために生きる道を選びとることで敗戦の虚脱状態から抜け出すこと

ができたが、「あらためてふり返ってみると、めざす方向は変わったが、天下国家のためという生き方それ自体は、戦前と戦後であまり変わっていないような気がする」ということを率直に述べていた。組合活動家としての人生に対して清算主義的になっているわけではないのだが、むしろあらためてその正当性を歴史的に再確認したいというその思いに応えるべく、当事者の体験に根ざした戦後教育のとらえ直しの取組みが始められた。

日本の教師集団は、戦後のある時期、自主教研運動を通じて互いに切磋琢磨し合う職場集団を形成し、職場集団によって育てられた新人教師がまたその職場集団の担い手になっていくという、自立的で自律的な職能集団としての豊かな可能性を示していた。そうした豊かな可能性をもっていた職場集団が解体的な状況を呈するに至ったのは、直接的には系統的な組合潰し政策の結果である。しかし、かつての職場集団に外圧がなかったわけではないし（むしろ外圧への反発こそが結束を強めるということもある）、そのときの外圧の方が弱かったというわけでもおそくない。

本研究は、会員制の民間教育研究所である群馬県高校教育研究所（2009年、群馬教育文化フォーラムと改称）との共同研究プロジェクトとして着手されたものであるが、研究所のスタッフで、元高校教師の萩原慧は、自分たちがやってきたことの意味がきちんと検証されないもどかしさということを語っていた。そこには、外圧に対する怒りとともに、職場集団の文化の世代間の継承はどうすれば取り戻せるかという切実な問題意識があった。

2. 研究の目的

公開の場でライフヒストリーの聞き取りを行うという本研究が採用した方法は、戦後教育の一断面を生きた当事者の証言を記録することと、大勢の聞き手に向けての<語り>が、一人ひとりの聞き手の中に語り継がれる<物語>を生成することを通じて、世代を超えて継承されていくことをめざすという両立困難な二つの目標を追求しようとするもの

である。

3. 研究の方法

教師たちの間で語り継がれている記憶に残る教師たちを、インフォーマント教師や公開インタビューの参加者の口コミを通じて、雪だるま方式で次々公開インタビューの場に登場してもらい、インタビューおよびインタビュー後の参加者による語りのシェアも録音に残し、テープ起こしによる文字データとして記録した。

インフォーマント教師の選定の具体的指針としては、戦後教育史のエポックに添った教職経験者（例えば戦前に教壇に立っていた教師、戦争責任を語れる教師等）、義務教育学校の教師と高校教師のバランス、参加者の問題意識に関する話題を提供できる教師（例えば管理職経験者、高校男女共学の研究者等）、群馬を代表するすぐれた教育実践者、などを目安とした。

インタビューの視点としては、一人一人の個別体験を通して戦後教育の歴史を追体験していくという大きな枠と、その中で一人ひとりの教師がそのキャリア形成をどのように行っていたか、キャリア発達の節目となった出来事を中心尋ねるといった二つの視点に基づいてインタビューを構成している。

公開の場であり、教え子やその父母、同僚教師などが聞き手の中にいる場合も多い。聞きに来てほしい人たちのことを頭に思い浮かべてインフォーマントとなること引き受けてくれる人も少なくない。状況を共有した人たちが聞いているということは、基本的には、語り手が恣意的に内容を操作することの歯止めとなっているが、逆に公開だからこそ話しにくかったり、話せなかったりすることもあるかもしれないし、聞き手に遠慮したり、迎合したりして本音が語れない場合もあるかもしれない。事前に打ち合わせを行い、語りたくないこと、聴きたいことを整理したうえで当日のインタビューに臨んではいるが、参加者も含めた聞き手との相互作用の中で話すつもりがなかったことを話してしまう場合もある。

テープを起こして文字の記録にする際、記

憶の誤りを訂正したり、冗長な文章を整理したり、舌足らずな表現を補ったりするために本人校正を行っているが、文字に残したくないものが削除される場合もある。

記録として活用する際には、そうした制約のあるデータであることを十分踏まえ、活用する必要がある。

4. 研究成果

率直に言って、公開インタビューの場を教員文化の世代間の継承の場として活性化させ、その場における<語り>の生成のフィールドワークを行うという目論見は、地道に回数だけは重ねてきているものの、多忙な現職教師を巻き込む運動たりえていないが、日本の戦後教育の当事者の語りの記録の蒐集という点では、補助金の助成を受ける以前からのものも含めて30名の群馬の小・中・高の教師の公開インタビューを実施し、参加者が10名に満たない時もあったが、多い時は50名を超える一般市民も含めた参加者たちと共に、「語り」を触媒とする地域における意味生成の実験的空間を創出・維持してきている。その貴重な記録は、「戦後教育史学習会ニュース」というかたちで学習会を支える会員たちに郵送され、さらにそれを製本した「年報戦後教育史を学ぶ」も3冊が刊行済みで、4冊目もすでに編集を終え、印刷・製本を待つばかりになっている。2009年3月にはシンポジウム「日本の教師の歩んできた道」を開催し、北海道における「教師の学校」の実践・研究との交流を通じて、教師のライフストーリーの語り・聞き取りの研究的実践の現段階における成果と課題を確認した。

蒐集したライフストーリーの分析はまだその作業の途上にあるが、一つの見通しとして、世代の体験の共通性という観点から、勤評闘争を体験している「パイオニア」としての第一世代のものと、勤評後に第一世代の先輩たちがつくっている職場に入職し「職場集団に育てられた」第二世代のものに分けることができるように思われる。

勤評闘争を通じて、子ども・親・地域と連携して教育実践をつくっていくことの重要性にめざめた日本の教師集団は、教員組合の

教育課程の自主編成運動などを通じて、自立的で自律的な職能集団としての豊かな可能性を示すようになったが、そこにはいくつかの要因が背景にあったように思われる。

その一つは、改正前の教育基本法に謳われていたように、憲法の理念の実現を「教育の力にまつ」とする新しい国づくりの礎としての教育重視の姿勢と、それを具体化した開放性の教員養成システムであり、戦後の就職難ともあいまって、実際に4年制大学を出た優秀な人材たちによって同時代の水準と比較して、ひじょうに高い水準の教員集団が形成されていたということである。

もう一つは、国際的な新教育運動の理念を発展させ、日本の子どもたちの生活の現実との格闘を通じて、日本の教師たちが自前で生み出した理論と実践である、戦前の生活教育や生活つづり方の遺産が存在したことである。

こうした背景のもとで、勤評闘争を通じて、子ども・親・地域と連携して教育実践をつくっていくことの重要性にめざめた第一世代の教師たちは、教員組合の教育課程の自主編成運動などを通じて、自らの教育実践を創造していくと同時に、自立的で自律的な職能集団としての職場集団を形成するようになる。

第一世代の人たちの語るライフストーリーと第二世代の人たちのそれとの大きなちがいは、そのような職能集団としての職場集団を前提にキャリア発達が語られるかどうか、というところで大きく異なっていた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔論文発表〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 2件)

平野和弘

教師のライフストーリー公開インタビューの成果と課題 日本教師教育学会第19回研究大会 2009年10月 弘前大学(発表決定)

平野和弘，船橋聖一，萩原慧，橋本寛文

教師のライフヒストリーを聴く市民学習会
は地域を励ますか 日本教育学会第 64 回大
会 2005 年 8 月 東京学芸大学

〔図書〕(計 4 件)

年報(2007)戦後教育史を学ぶ 群馬県
高校教育研究所 2009 年 8 月発行決定

平野和弘編 シンポジウム“日本の教師
の歩んできた道”報告集 2009 年 5 月発行
84 ページ

年報(2006)戦後教育史を学ぶ 群馬県
高校教育研究所 2007 年 7 月 387 ページ

年報(2005)戦後教育史を学ぶ 群馬県
高校教育研究所 2005 年 8 月 396 ページ

6 . 研究組織

(1)研究代表者

平野 和弘 (HIRANO KAZUHIRO)
東洋大学・国際地域学部・教授
研究者番号 : 50348132

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし